

— 2 —

による大規模な侵寇を受け Lan Chang (ルアン・プラバン) に遁入した。その結果、ナンを含めて近隣諸土侯国の王はその承襲・移封をチェンマイのビルマ人総督 Chao Fa Sarawadi によって決定されることになった。この間群小土侯国は単独或は連合して度々ビルマ族に抗戦するが、敗戦の度にラオス方面に住民こぞって逃亡している。これら一連の戦闘によってランナ・タイは甚だしい荒廃を受けた。

(4) 48・49代と続けてビルマ・アヴァの皇子が承襲した後、チェンマイから迎えられた 51代 Chao Phraya Luang Tin Mahawong 以降を年代記では Chao Phraya Luang Tin の王朝と改めて区分し、彼はそのまま初代に格付けされている。19世紀初頭にはナンは現チャクリー朝の宗主権下に入り、ナン王は全てバンコクの指名を受けて承襲しているが、歴代の王は何らかの形で彼の血縁につながっている。現チャクリー朝のもとでは、ナンは立場をかえチェンマイ、チェンライなどと共にバンコクの命によってシブ・ソン・パンナの攻略及びラオス方面の反乱鎮圧に従事している。

西北タイの群小土侯国は、ビルマ、ラオス両面から挟まれ且つ両者とアユティヤ、バンコクを結ぶ要衝に位置している。ために再三近隣諸国・諸族の侵略・併合を蒙り、支配関係は一層錯綜している。このことは、群小土侯国がバンコク、ビルマ、ラオスなど周辺の幾つかの政治圏に対して歴史上どのような役割を果たしたかという重要な課題の1つを私達に提示している。

(「ナン王国年代記」の原典は、1894A・D ナン国皇子の命により編纂されたものであるが、
「Ruang ratchawongpakon phongsawadan muang nan」の表題で1919A・Dバンコクで公刊されている)

道光・咸豊両朝とチャクリ王朝との国際関係について

野 田 彦四郎

1. タイ国の現代政治については、Virginia Thompson: Government Instability in Siam の論著をはじめとして、諸種の研究によって詳述されているが、これらを総合的に考察するとき、タイ国の政治課題として考究しなければならぬものは対外問題、わけて中国問題であるとする有力な論説のあることは深く留意しなければならぬ一事である。その対中国問題の由って来るところの清国とチャクリ王朝との国際関係についての論文はその数、はなはだ少ないのでここに上述のテーマについての研究を進めたわけである。

2. チャクリ王朝と清国との史的関係についてこれを朝貢貿易の伸張・隆替とそれによる両国関係の緊密度を基幹として考察するとき、次のように三時期として把握することが、もっとも当を得ているとの見解をとっている。

- (1) 朝貢貿易の伸張と清タイ交渉の殷盛（乾隆47年～道光23年）
- (2) 朝貢貿易の不振と清タイ交渉の衰退（道光23年～同治7年）
- (3) 朝貢貿易の終焉と清タイ関係の阻隔（同治8年～宣統帝の退位）

そして本テーマの道・咸兩朝は、上記1および2の両時期に相当している。

3. 朝貢貿易の伸張と清タイ交渉の殷盛

本テーマに基づけば、清の道光元年より23年までで、あたかもチャクリ王朝においてはラーマ2世の晩年より、ラーマ3世の治世20年までがこの時期に相当する。

道光の世は、康熙・乾隆・嘉慶の後を承けて、少なくともその前半においては、清朝の盛時で、中国君主政治の熟爛した時代であった。従って清はタイに対しても冊封と貿易による実利との両面を要求し、恩威ならび行なわれたのである。わたくしは両国の国際関係を、大清歴朝實録をはじめとして、東華錄、粵海關志、清朝續文献通考、欽定大清會典事例、ならびに明清史料等により、総合的に比較考究をなし、タイ国よりの方物の献上および、万寿奉祝など入貢、遣使の両国交渉について調べたのであるが、これらはじつに殷懃鄭重に行なわれた。

なお、わたくしは、それらの究明のうち、次の4点についてはその経緯を明瞭にし、もって、清チャクリ王朝関係の意義を浮彫にするように努めた。

- (1) 朝貢船と庄館貨物。
- (2) 洋上における頻度しげき遭難と清国の撫恤。
- (3) シャム国恭進の品目と清よりの賞賜ならびに貿易品。
- (4) 清・チャクリ王朝交渉史上における華僑の活躍。

4. 朝貢貿易の不振と清タイ交渉の替衰

道光23年より咸豐11年までで、チャクリ王朝においてはラーマ3世20年よりラーマ4世の治世11年間までがこれに当たる。さしも殷賑を極めた朝貢貿易に、すでに一葉落ちて天下の秋を知る事態が到来した。